嗚呼いやなことだ
自虐と倫理

高田里恵子

芸のない書き出し

だいたいわたしは相当の気取り屋なので、文章の書き出しに凝ろうとする。何か読者を惹きつけるようなものは書けないかとウンウン考えてみる。で、とどのつまりは自己嫌悪に陥って、ごく平凡な書き出しに落ち着く。

しかし今回は、はじめから芸のない一文を書いてしまった。この拙文をどういうテーマにするか、編集の前田年昭さんと何回かメールを交換した経緯を最初に書いておきたいので、どうしたって、わたし好みのスノッブな書き出しは選択できないと思いこんでいるからである。こういうふうに何でも他人のせいにしてしまうことは、いつもと変わらない。

いろいろなやり取りは適当に省略して結論だけを書けば、前田さんからは「左翼のダメなところ」を書いてみないか、と誘われた。しかも「ダメなところ」とは、左翼エリート主義を指しているらしい。

ああ、これは罠だ、罠にちがいない、誰かがわたしを陥れようとしているぞ（理由はわかんないけれど）！

と一瞬思い、自分の「ダメなところ」を書けと言われれば、小学校の各種反省会以来の得意技だから目をつむったままだって書けるけれど、他人様の「ダメなところ」なんか書けるわけがない、とも考える。前田さんからは、左翼に反対する側からの左翼エリート主義批判は数多くあるけれども、『悍』のような反権力運動の側からこの問題を切開した特集は見られない、という話があった。

はてさて？

とここで思う。わたしはとことん非政治的な人間であるが、そのわたしの素人感覚では、左翼エリートたちは自己批判が好き、自分の「ダメなところ」をエグるのが大好き、という理解なのである。自虐こそ彼らの最大の特徴ではないのか。

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 2 10.4.26 2:40:13 AM

もっとも、わたしがこんな考えをもってしまったのは、実在の（元・）左翼エリートたちを観察した結果ではない。残念ながら、わたしの周りにそんな人物はいないのだから。高見順（一九〇七―六五）の、いわゆる転向小説を読んで感じたことである。高見は、文学史では一九三〇年代の転向小説の代表として挙げられる『故旧忘れ得べき』（一九三五）と『嗚呼いやなことだ』（一九三六）において、旧制一高と東京帝国大学の左翼エリート仲間のそれぞれの挫折と心の恥部を描きだした。自分と仲間の「ダメなところ」を、これでもか、これでもかと晒してみせたのである。

こうした視点から、高見順を中心とした昭和初年の転向作家の動きを扱うことで、「左翼のダメなところ」という、この自虐特集に何とかそえないだろうか。

と願っているうちに、もうすでに芸なくズルズル書きはじめてしまっている次第なのである。

高見順
（東京・港区教育委員会
ウェブサイトから）

自罰と自虐

左翼運動に挫折し、逮捕歴などのせいで就職もままならず困窮していた人間が、やっと職も得て生活に目鼻が付きはじめたときに突然自殺してしまう。そうした心の動きがよくわからない、と述べた本多秋五（一九〇八―二〇〇一）にたいして、そうだろうか、自分にはよく理解できる、と磯田光一（一九三一―八七）は文句をつけた。「こういう死に方が「ピンとくる」かこないかが、高見順を理解するポイントになるという思いを、私は禁じえない」、と。

たしかに、『故旧忘れ得べき』には、そのような自殺が描かれているのである。もう少し、磯田の言葉を引用してみよう（「自罰の宿命」『高見順全集』月報6）。

私は左翼運動をイデオロギー的実践として通った人間ではない。しかしイデオロギーで武装した人々の心の底に、〝自罰〟としかいいようのない感情の宿っているのを私は知っている。弾圧や孤立は、運動を後退させる要因にはなる。また運動者に襲いかかる生活の不如意は、人々に苦痛を与えはする。しかしそれにもかかわらず、人々がなおも生きていけるのは、この世に迫害されることが、おのれの異端としての宿命を噛みしめる条件をなしているからである。もし反逆の罪がすべて許され、世間並みの生活にまで自己が上昇してしまったとき、人

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 3　10.4.26 2:40:15 AM

はははたして何によって生きることができるであろうか。〝禁じられた思想〟をこそ、おのれの掛け換えのならぬ宿命として生きた人間に、突如、虚脱感が襲いかかるのは、まぎれもなくそういうときである。

先走って言えば、この「自罰」は何か抽象的なものではない。学歴エリートとして約束されている出世と安定した生活をみずから捨てることなのだ。そのようにして、みずからを異端者、反逆者、受難者へと聖化する。つまり「自罰」は、高学歴者の負のエリート主義のあらわれでもある。日本の左翼運動は、近代日本のエンジンであった立身出世主義の裏面という特徴をもっている。同じもののウラとオモテと表現してもよいのだが、わたしたちはその最後の好例を、東大紛争のなかに見いだせるだろう。

だから、この「自罰」というのは、実はけっこう、いやったらしいものなのである。

磯田は、高見順のなかに「〝陽の当たらない場所〟に堕ちていきたい」（傍点原文）という「〝自罰〟への希求」を見てとっており、それはそのとおりであるのだが、同時に、そうした負の自己特権化の滑稽さこそを、高見はきわめて自虐的に描きだした。

「自罰」を自虐すること。

それが、『故旧忘れ得べき』という転向小説なのではないか。この方向で読んでいくために、まずは、同じ一九三五年に発表された中野重治（一九〇二―七九）の『村の家』を引きあいに出したい。

父の助言に背いて

転向文学として最も名高いのが『村の家』である。また、わたし個人としても好きな作品である。しかし、中野重治は、磯田光一の言う「自罰」からは遠いところにいる人間なので（桶谷秀昭の優れた中野重治論の副題は「自責の文学」であるが）、高見順の小説が与えるような何ともやりきれない感じ（という魅力）は、『村の家』にはない。

転向して出獄してきたプロレタリア作家の息子にたいして、思想を貫くことができなかった以上、「筆ア捨ててしまえ」と迫る田舎の老父と、「よくわかりますが、やはり書いて行きたいと思います」と答える息子とのドラマは、さまざまな論考で言及されてきたので、ここではもう触れる必要もあるまい。

この父は、「息子が刑務所にはいっていることに何のひけ目も感じなかった」と書かれてあるように、息子がアカであろうと何であろうと世間に恐れいったりしない。それどころか、父はイデオロギーとも運動とも無縁の人間であるが、「おまえがつかまったと聞いたときにゃ、おとっつぁんらは、死んでくるものとしていっさい処理してきた」と言うほどの覚悟をもっている。

息子のほうでも、自分が逮捕され親が肩身の狭い思いを

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 4 10.4.26 2:40:15 AM

しているだろう、申し訳ない、などとは思わない。彼は第一審ではじめて法廷に立ったときに、親子のあいだについて聞いた裁判官を軽蔑する。「政治犯人の審問に家庭問題を持ちだすことが卑しいトリックに思えたと同時に、「たとえおれが掏摸を働いたのだとしても、それャおれ一人のせいなんだ。」と言いはなちたかった」。

要するに父も息子も独立独歩の精神を備えている。繰りかえすが、学歴エリートの左傾が意味するものは、立身出世の栄光を、ブルブルだらしなく震えながらみずから捨てること、親（村の家）の期待に背くことである。ここから生まれうる卑小な（ゆえに心打つ）葛藤が『村の家』には出てこない。そして、その点において、『村の家』は転向小説の白眉であるとともに、例外中の例外であるとも言える。

福井の自作農兼小地主である「おとっつぁん」は汗水流して働き、優秀な息子をふたりとも東京帝国大学に送りこむ。ここまでは、近代日本に特徴的な上昇の物語である。しかし、長男は法学部を出て朝鮮銀行に勤めて一年経たぬうちにウラジオストックで病死。作家になった次男は左翼非合法活動のために治安維持法に引っかかってしまう。

この素材だけで、立身出世主義からの転落の物語ができるのだが、グチ一つこぼさぬ家長の姿は、むしろ彼が、近代日本の原理たる立身出世主義などに少しもとらわれていなかったことを証明してみせるのである。

その一方で、「おとっつぁん」は、立身出世の埒外に置かれている村の農民たちが、上昇していく者に密かな嫉妬を抱いているのも、ちゃんと知っている。百姓たちは決して理想化されていない。「村のものアみんなお気の毒なっていうじゃろ。しかし中にゃ肚で喜んでいるものもあるんじゃ。そりゃおまえらア知らん。百姓ってもなそんなもんじゃない。なんか人に困ったことがあれゃ、わが身が得したようにしてうるしがるんじゃ。先祖代々じゃからして仕方がない。おとっつぁんにはそれがわかる。わかったからって仕方がないがいねして」。

母の願いに背いて

このように『村の家』が、他者との向かいあい方において、こう言ってよければ非日本的な毅然たるものを備えた個人を描いたのにたいして、高見順の転向小説は、転向エリートたちの隠された立身出世主義と相互の腹の探りあいをめぐる、きわめて日本的な話になっている。ここで、非日本的と日本的という陳腐な対比をあえて使ったのは、他者の評価に脅かされる人間という図のなかに近代日本の特徴を見いだし、それが昭和期マルクス主義運動のなかにもあらわれていることを強調するためである（これは本稿の目的の一つでもある）。

いまは懐かしき『現代の眼』の一九七二年一月号で、丸山静（一九一四―八七）と長谷川宏（一九四〇年生まれ）が「中

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 5　10.4.26 2:40:16 AM

野重治と高見順」という題名で対談をしているが、たしかに、このふたりの小説家は「一九三〇年代における文学者のあり方の二つの典型と考えて」（長谷川）いいだろう。おまけに、出身地まで同じ福井県坂井郡であるという。

丸山も長谷川も中野重治のほうを高く評価している。とくに長谷川は、高見順においては「マルクス主義自身が風俗として受け入れられているという感じ」である、とも指摘している。「いまはどうかしらないが、私が入学したころの〔東大〕駒場は一種の反権力ムード、情緒的には左翼的な心情みたいなものが支配的で、マルクス主義が一つの流行となっていた。高見順はたぶんそれと似たムードのなかで左傾化し、その域をついにでていないとおもわれる」。

しかしこれは、高見順がそうであるというより、高見順が『故旧忘れ得べき』で自嘲的に書いている一高生や帝大生の左傾化がそうした特徴を示しているのである。だから、彼らは自分が（うっかり）捨ててしまったエリートの道を惜しんでいるような、軽蔑しているような複雑な表情を見せる。元左翼運動家の若き帝大卒たちの会話を引用しよう。

課長はざらだ、驚くには当らない。篠原が何故か不機嫌な口調で言った。M―を知っているだろう、〔一高の〕社会思想研究会にも顔を出していたあれはこの間S―県の特高課長に成った。そして鼻をフフンと鳴らし、彼の傍で口をあけて驚嘆している小関に蔑むような一瞥を投げた。同窓のこうしたトントン拍子の俗世的栄達を彼は軽蔑している風を装い、その装うことのうちにシンから軽蔑し切れぬモダモダのある事を却って暴露していた。あゝと松下は明瞭に長大息し、わしら考えんといかんわいと猪首を傾ければ、小関も、色黒くいかつい松下の側にいるから余計目立つ、女のようにしなやかな繊手でもって、顔を矢鱈に撫でくり廻し、これは彼が思い悶えていることを明らかにするものである。

高見順は、自分を呪縛していた立身出世主義を自伝的小説でたびたび取りあげた。よく知られているように、高見は、いわゆる私生児であった。出生当時父（永井荷風の父の実弟）は内務官僚として福井県知事を務めていたが、母子を見捨てるように東京に帰ってしまう。父を追って東京に出てきた母子は、子どもに会おうともしない冷たい父を恨みつつ、父の邸宅のそばの貧しい長屋に住みつく。母は、私生児と呼ばれるわが子も、本家の長男（高見順の異母兄）と同じように、一中―一高―東京帝大法学部―高級官僚という出世の王道を歩ませてみせると決意する。高見順が繰りかえし描いたのは、この母の切なる願いと意地、それを裏切っていく息子である。

一中、一高までは母の希望通りの道を歩んだ。しかし、東京帝国大学では文学部を選んでしまう。第一の裏切りで

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 6 10.4.26 2:40:17 AM

嗚呼、左翼

ある。そして左傾という第二の裏切り。

しかし重要なのは、この裏切りがいずれも中途半端であったことだ。それが高見順の自嘲の的になる。『故旧忘れ得べき』の主人公小関は母親の期待に背いて文学部にいくが、しかし「文科も英文科なら先ずは就職が安心の方であろうと考え」ることは忘れない。多くの左翼仲間が学校を中退していくなかで、自分は貧しい母親のために、高校と大学は無事卒業し、とりあえず就職しなければ、と思っている。小関は、勇敢に学歴を捨てていった友人を横目で見ながら、こう嘆く。

だってそうじゃないか、僕らは放校にでもなってみろ、もうすべてはおしまいだ、けれど友成〔友人の名〕には金力がある、その金力でいくらでも打開できる、その安心があればこそ向こう見ずなこともやれるというものだ、人は彼を果敢とし僕ごときを因循とするだろう、それは短見者流の考えさ、だってそうじゃないか、僕だって将来扶養しなければならない母親などのかわりに一生或はなんにもしないだって食ってゆける財産でもあって見ろ、実に僕は無責任になれる、すなわち勇猛猪突も敢えて出来る、僕の愚図は性質の問題ではなく、金の問題だ、あゝ僕も金持に生まれてくればよかったなあ云々。

『嗚呼いやなことだ』では圧迫者は兄に移された。この短篇小説は、主人公が左翼運動仲間の花輪恒雄について語るという構造になっている。花輪は転向して出獄したあとに縊首してしまう。語り手は、大学時代に一度だけ、この花輪恒雄から「沁々とした話」を聞いた。

兄の花輪盾雄は、彼の言葉から察すると、弟に学資を貢ぐということをば、自分の諦めた栄達の夢が弟によって実現できることと、そっくりきめて了っている風の窮屈な性格であった。僕は、だから、どうしても出世しなければならないんだ。そう花輪恒雄は唸るように言い、私はそうだねと頷いた。私は出世という小学校以来聞いたことがない懐かしい単語の響きを面白く感じた。――ところが、と彼は言い、そして歯をぐッと食いしばったことを、顎の附根の隆々たる筋肉にあらわして、もう一度、ところがと言った。（傍点原文）

「ところが」花輪は「この当時の良心的なインテリゲンチャの心を誰彼の見さかいなく必ず捉えないではおかなかった左翼思想」にも惹かれてしまうのである。「それは所謂出世の道から彼を裂いて行こうとするものであった。そして彼も裂かれねばならぬと頭の中ではしていたが、しかし気持が、兄のことを想う気持が、重い鎖となって彼から離れなかった」。

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 7　10.4.26 2:40:18 AM

金持ち左翼と貧乏左翼

このような出自の貧しさと、それとは不可分の立身出世への欲望は、インテリ左翼仲間には隠されるべき恥ずかしいものであり、恥と感じる自分がまた恥ずかしい存在に感じられてしまう。大地主の家に生まれた太宰治（一九〇九―四八）や、豊かな銀行家の父をもつ亀井勝一郎（一九〇七―六六）が、資本家階層の実家を原罪と感じたこととは対照的であろう。そして、太宰がいかに恥を口にしようとも、貧乏左翼の恥の感覚の切実さには負けてしまうのだ。

こうして見てくると、自作農兼小地主という出身の中野重治が、その程よい位置の出身階層のおかげで、わたしたちが注目している心の問題から自由だったような気がしてくるのである。

もっとも、中野も、支配層出身の左翼にたいして疑念を表明している。『むらぎも』（一九五四）は、昭和改元期の東大新人会のようすを描いた自伝的小説であるが、そのなかに、新人会仲間で、伯爵の子息である金持ち左翼が登場するのである。

その帝大生、沢田豊彦を訪ねた主人公は、長い廊下が交差点のように錯綜している大邸宅のなかを使用人に案内されて、家では「トヨサマ」と呼ばれているらしい若様の豪華な部屋にたどりつく。立派な書架には大きな本の背表紙が並び、安楽椅子が揺れている。

やがて紅茶が出され、「トヨサマ」が、紅茶がぬるいじゃないかと、年老いた女中を「恐ろしくつめたい、相手にさむ気をかぶせるといった口調」で叱りつける。主人公は、「上流に育った、ごく人のいい青年」とだけ思っていた沢田の別の面を見せつけられて、暗い気持ちになってしまう。

沢田のなかのマルクス主義と、ほんの日常の、女中にたいする主人としての態度とが、矛盾として本人にてんで映ってこないのだろう。大奥風、御殿女中式だ。つまりそこに、文学が――マルクス主義文学とまではいわない。――ないのだ。

中野重治の小説は主人公の気持ちを説明せず、主人公の心にふと浮かんだものをそのまま写すだけなので、少々わかりにくい引用になったかもしれない。この金持ち左翼に欠如していると言われている「文学」とはいったい何なのか。「トヨサマ」はそれこそ長谷川宏が言うように、マルクス主義が風俗のように流行った大正後期、うっかり左翼になってしまった者にちがいない。「トヨサマ」が浦和高校時代から、いささかスタンドプレーめいた活動をしていたことも語られている。

「トヨサマ」が批判されていることは明らかなので、主人公を憮然とさせる、「文学」の欠如とは、自分自身の矛

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 8 10.4.26 2:40:18 AM

盾をキリキリと追いつめるような感受性の欠如なのであろう。「トヨサマ」的人間は、わたしたちの周りにもよく見られるではないか。権力批判や反体制を標榜する評論家が大学や家庭では暴君として振舞うなぞということがないわけではない（いや、むしろこういう人間は凡庸な登場人物になりがちなので、「トヨサマ」が生きいきとした滑稽さをもつ形姿になっているところに中野の描写力を感じるくらいだ）。

そして、こうした意味で「文学」を捉えるならば、中野重治も高見順も「文学」のひとであった。「文学」のひと、などと中野重治以上の曖昧な言い方をしてしまったが、自分のなかの矛盾にたいして鈍感な左翼エリート仲間（それどころか自分自身）への鋭い視線という点で、中野と高見は似ているということを言いたかったのである。

同じことと違うこと

ここでもうひとり、「文学」のひととして亀井勝一郎の名を挙げよう。先に述べたように亀井が「トヨサマ」ほどではないにしろ、金持ち東大新人会員であったからだが、それだけではなく、高見順との共通点と、それゆえに明らかになる相違点に注目したいからである。

たしかに高見順と亀井勝一郎には妙に類似点が多い。ふたりの作家は同じ一九〇七年に生まれ、亀井は一九二六年に、高見はその翌年に東京帝国大学文学部に進んでいる。そして治安維持法違反容疑による検挙、転向、出獄。

しかし、転向後のふたりの大きな（あるいは小さな）相違は、文学史の事実としてよく知られているだろう。一九三〇年代中ごろ、高見順は『人民文庫』、亀井勝一郎は『日本浪曼派』を根城にして本格的な文学活動に入っていく。高見は体制にたいして何とか曖昧な態度を保持したが、亀井は、右翼的とまではいかないけれども、いわゆる日本主義的な立場をとるようになった。高見順と亀井勝一郎もまた、「一九三〇年代における文学者のあり方の二つの典型」を示しているのだ。

高見順は、最初は怒りを覚えたという平野謙（一九〇七―七八）の見解を受けいれて、当事者の立場から、『人民文庫』と『日本浪曼派』とは「転向という一本の木から出た二つの枝」であるということを認めた。つまり、二つのかたちの挫折、左翼運動からの退却である。

認めつつ、しかしその違いを高見は説明しようとする。高見が最晩年、食道癌の手術のあとに残した日記から引用しよう（『闘病日記』岩波現代文庫版）。高見が心に決めたことは「たとえ転向しても「反動」にならないということ」であったという。思想を捨てさせられたけれども、「新たな「思想」で「武装」することはよそう。当局からはそういう要求があったが、日本主義で「武装」することなど、あくまで拒もうとした」、と。それにたいして「亀井君などはその批評家精神の故に、新たな何かをつかまねば、苦

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 9　10.4.26 2:40:19 AM

亀井勝一郎
（北海道・函館市
ウェブサイトから）

しくてやりきれなかった。私たちのような転向ではすまされなかった。素手になるということではダメだった。そこで、結局、反動的浪曼派に行かざるをえなかった」。

「「思想」で「武装」する」という表現は、高見がマルクス主義思想をどのように考えていたかを示すものであり、長谷川宏の批判的見解の正しさを裏付けてしまうかもしれないが、いまは触れまい。ここで注目しておきたいのは、亀井勝一郎も同じように、転向後は「武装」を拒否したという自己理解をもっていることである。「思想、主義などはいっさい信用しまい。「立場」なき不安を、不安とせぬ心をもとうと念じた」と自伝『我が精神の遍歴』（一九四八）のなかで振り返っている。

その亀井が、同じく食道癌で高見の死より一年後に亡くなる（余談だが、やはり同年生まれで、左翼運動にかかわった平野謙も食道癌で亡くなった）。亀井が同じように癌に侵されていることを知った高見は、日記にこう書いた。今度は「思想で苦しむ」という表現が出てくる。

> 亀井君！　亀井君！
> ともに我らは思想で苦しみ、そしてがんで苦しむ。同じ世代の人間でも、てんで思想で苦しんだりはしなかったエゴイストもいる。彼等はがんで苦しむこともないだろう。
> （傍点原文）

日記だからだろうか、それとも目前に迫った死のせいであろうか、正直でもあり、いくぶん非論理的でセンチメンタルでもある。だが、あの青春の日々にエゴイストではいられなかったという倫理観、その苦しみと誇り、そして亀井にたいする同志的感情をこれほど率直に述べている場所はない。「トヨサマ」に戻って言えば、「トヨサマ」は苦しまない人間なのである。

聞き飽きた批判を一つ

「自罰」という言葉は、高見順よりも、この金持ち左翼の亀井勝一郎のほうにあてはまるかもしれない。『我が精神の遍歴』のなかには、磯田光一の言う「〝自罰〟としかいいようのない感情」を明瞭に見てとることができるのである。「富める者」として、貧しい同級生たちにたいして申し訳なさを感じてしまう亀井少年。

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 10　10.4.26 2:40:20 AM

亀井は旧制高校に合格したときの気持ちを、こんなふうに綴っている。

小学を終えて中学に入りうる者は一部にすぎない。中学を終えて上級学校へ行ける者はさらに稀である。それはかつての仲間に対する、一種の運命的な裏切り行為ではなかろうかというふうに感ずる。こうして生ずる社会的地位の差異に、優越を感ずるとはいかなる感覚であろうか。酒杯を挙げて息子の「出世」を祝う父の顔を見ながら、僕は羞恥を感じた。家族の幸福の傀儡（かいらい）である自分を感じた。家庭に漂うこの間の抜けた幸福感を、一挙に粉砕すべき突発事故が起こらぬものかと、少年は意地わるく空想したものである。ふと、自分が縊死している姿を想像したことを記憶している。

この自慢の秀才息子が東大を中退し、やがて逮捕される。そのことを亀井は、「痛快な復讐がいまこそ成就した」というように表現した。「僕の入獄を、絶望の眼をもって眺め、未来に賭けたいっさいの世俗的栄誉が空しく消え去ったのを愕然と凝視している家族たちの悲痛な顔が浮かんでくる。それに向かって蓮如的な冷笑を浴びせかけた」。と同時に、独房に座した亀井は、「富める者」として感じてきた罪悪感から、はじめて解放され、「深い安堵の嘆息を漏らした」のだった。

「復讐」という言葉は貧乏左翼の高見順も使う。自伝的な短篇『私生児』のなかで、こう告白されている。「ああ、わたしはこういう境涯から早く抜け出し浮びあがり、立身致したいと歯を食い縛った。そしてなにかに復讐したいと修羅を燃やしていたのだが、しかし私が大学にはいる頃になると、私の頭には、立身とは反対の手段で復讐すべきだとする思想が漸く養われて行ったのである」（傍点原文）。

俗世のなかでよい位置を得るためには、つまり父母を喜ばすためには上級学校に進まなければならないということが、出自の豊かさや貧しさにかかわりなく、優秀な少年の心をとらえている。これは、近代日本の構造を鮮やかに映しだしているだろう。もう一度だけ繰りかえせば、そうした近代日本の原理たる立身出世主義に反逆することと、左翼運動とは切り離せないのである。その点においては、金持ち左翼と貧乏左翼のあいだに差はない。

このように高見順も亀井勝一郎も、自分自身の心の、しかも時には「武装」を必要とした弱い心の倫理的問題に、極端に言えば、ただそれだけにこだわったわけだが、彼らの苦しみは、政治運動を体験しなかった者にとっても、「文学」的感受性として理解できるし、感動的であるとすら言える。

それでも、ここに、現実の大衆への眼差しが欠けているのは明らかだろう。要するに、こういうもの（大衆の無視、もしくは大衆を指導の対象としてしか見ていないこと）が

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 11　10.4.26 2:40:20 AM

左翼エリート主義と呼ばれるわけだが、これをわざわざあげつらっても意味がないことは承知している。むしろ、これだけ堂々と自分自身の生き方だけにこだわることができるのは、アッパレではなかろうかと、と言いたいのである。

吉本隆明の有名な転向論に触れたとき、「私は思わず自分でアッと声をあげたものであります」、と高見順は告白している（「現代の挫折について」一九六〇）。周知のように、吉本は転向の原因を権力による強制ではなく、インテリ左翼が大衆からの孤立を感じたことのなかに見た。「そういうことに今まで気がつかなかった」と高見順は、アッと驚いた。大衆からの孤立感なんか気に留めなかったが、たしかに考えてみれば思いあたるというわけである。

なんと「迂闊」であることよ、と磯田光一は呆れる。「しかし私はその迂闊さを指摘すると同時に、その迂闊さこそ、彼〔高見〕をして昭和文学の一代表者たらしめている要因であったことを強調したい」（『昭和作家論集成』）。

故旧、憂鬱、されど、サヨク

というわけで、高見順の転向小説『故旧忘れ得べき』が描いたのは、左翼仲間同士のやりとり、ごくごく狭いサークル内の人間関係、正確に言えばエリート男性同士の関係である。それを、これほどいやったらしく、つまりこれほど見事に描いた作品はない。

舞台は学園、しかもエリート校である。エリート校というより、左翼学生たちがみずからをエリートと見なしうるような学校と表現したほうがいいだろう。

最初に引用した磯田光一の「自罰」をめぐる文章のなかで、高橋和巳（一九三一―七一）の『憂鬱なる党派』（一九六五）が、『故旧忘れ得べき』の後裔として挙げられている。たしかに、一九五〇年前後の京都大学における左翼運動グループと周辺学生のその後の挫折と「自罰」が、ここには描かれている。何とか安定した市民生活にもぐりこんだ者は、政治運動によって自分の人生を台無しにしてしまった者への同情とともに、自分自身の不甲斐なさと後ろめたさを感じてしまうのだ。運動にヨリ長く、ヨリ献身的に留まりえた者にたいして、そうでなかった者は「遠慮したり劣等感を感じたり」してしまう。

柴田翔（一九三五年生まれ）の『されどわれらが日々――』（一九六四）も、『故旧忘れ得べき』に連なる作品かもしれない。中村光夫（一九一一―八八）は柴田の小説の芥川賞選評のなかで、「共産党の「無謬性」にたいする信仰の破綻を扱いながら、これらの学生の住む狭いサークルが唯一の世界として前提され、したがって彼等の発散するエリット意識がまったく無視されていたりします」と述べているが、たしかに、対象は東京大学のなかの小さな共産党グループ、そして「六全協」（一九五五）のあとの党員東大生の挫折に絞られている。

ある学生は、挫折後の、サラリーマンとしての順調な生

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 12 10.4.26 2:40:21 AM

活のなかで、自分がどれほど卑怯でなく行動しえたか、自分自身の倫理に問わずにはいられず、また同志たちに冷たく裁定されているような気持ちに苛まれ、自殺を選ぶ。「さようなら、冷静で強いぼくの監視者！　ぼくは君の眼からも、これで逃れて行きます。さようなら、ぼくの冷たい眼」というのが、遺書の最後の言葉となる。

この系列、つまり小さな左翼グループのなかの話という系列の最後に来るのが、正確に言えば、それを最後にぶち壊してパロディ化したのが、島田雅彦（一九六一年生まれ）の『優しいサヨクのための嬉遊曲』（一九八三）であろう。「反体制運動を研究するサークル」は楽しい大学内サークルの一つであり、メンバーたちはもはやエリートの自覚など少しももっていない（実際に学歴エリートではないのだが）。サークルの代表者は、メンバーたちに「頼りなく感じる」と言われるほど「優し過ぎ」、「物解りが良過ぎる」。彼は「サークルには規則も強制もない。僕たちはゆるい結びつきでもいいんだ」と、新入りの学生に話すのだ。

こんな「ゆるい」、何の規則も序列も命令もないような左翼グループはなかった、と磯田光一は有名な論考『左翼がサヨクになるとき』（一九八六）の最終章で述べている。「ゆるい結びつき」のもとでは、もはや左翼の倫理的要請が転向者を自虐（や自殺）に追いこんだり、仲間同士の張りあいを引きおこしたりすることもない。

青春残酷物語

ひょっとすると現代の若い読者には、『故旧忘れ得べき』に描かれている帝大生たちの、小説中の言葉を使えば「左翼的虚栄」があまりよく理解できないのではなかろうか。

左翼エリート主義とは、ふつうは労働者大衆にたいする、エリートの指導者意識を指すのであろう。しかし高見順や亀井勝一郎が描いたのは、左翼エリートたち内部の序列なのである。高見は一九三七年に書かれた「法科的と文科的」というエッセイのなかで、転向後に右翼の論客となっていった林房雄（一九〇三―七五）の左右を問わない指導者意識を「〔東大〕法科的な気力」と皮肉っている。戦後の連作長編『深淵』（一九四七―五〇）では、林のありようを「左翼運動によって植えつけられた指導者意識」のあらわれと見た。「どんな場合も指導者面をしていたいのだ。号令をかけていたいのだ」、と。だが、この「号令」をかけるという行為はエリートサークル内での話なのである。

エリート内部の主導権争いは、もちろん体制エリートにも見られるものだが、というより、そちらのほうの専売特許であろうが、左翼エリートの場合は、アンチ立身出世主義という大看板のせいなのか、それが奇妙に屈折し、より残酷な人間関係を導きだしてしまうのである。

亀井勝一郎は、東大新人会が「若い者が大ぜい集まっていた」グループにもかかわらず、きわめてストイック

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 13　10.4.26 2:40:22 AM

であったと振り返っている。「女の話をすることは全くなかったし、酒を飲むことも堅く禁ぜられていた」。

新人会員の帝大生たちは本当に誠実であったが、「しかし他方では、ストイックな生活の裡に在って、お互いがお互いをぬすみ見、看視しあっているような空気を感じることがしばしばあった」。

このような相互監視のなかで、「つねに革命的言辞を弄し、つねに勇敢であることを、同志の面前に競って証明しておこうという偽態を僕は身につけていったようである。人の見ているところで、あるいは人の顔を見て、というふうに自分の心は動いていく」。

『故旧忘れ得べき』は、若き左翼東大生たちの「ひけらかし」を、もう少し滑稽化して、あるいは悲哀を込めて描いている。

どうだ、俺はこんなにも非合法の内情に精通しているんだぞ、参ったろうという微笑である。心ある者は同席するに堪えない程の、左翼的虚栄といったものにみちみちた、左様それを抜いたらなんにも残らない応酬に、彼等はいきり立っているのが常であった。

それでは「その儘まっすぐに実践へと突き進んで行った」本物の（？）左翼学生はどうかと言えば、彼らが、「ひけらかし」の左翼エリートたちの後ろめたさを利用し、かつ彼らの上に君臨しようとしていた面もないわけではないのである。

そして小説の最後に届くのが、「黒馬」と呼ばれ最も勇敢で誠実だった運動者、澤村（『嗚呼いやなことだ』の花輪恒雄に当たる人物）の自殺の報である。拙論の冒頭付近で、「自罰」という言葉とともに取りあげた自殺だ。弾圧のもとでちりぢりになった運動グループが、「黒馬」追悼のために一堂に集まるところで小説は終わる。

ついに「ひけらかし」と後ろめたさの領域を出なかった副主人公の篠原は、澤村の絶望がエリートの道を捨てたことへの後悔から来ているのではないかと考えてしまって、「自分の汚さに自ら腹をたてるのであった」。

足並が遅れたのならまだしも、もはや取りかえしのつかないことになっている自分を澤村は顧み、生涯どんなにあがいても自分はもう駄目だという絶望が彼を殺したのだと篠原は忽ちピンと感じたのであった。そうに違いないと篠原は思ったがそれを牧野晃夫などに明らかに言うとそんな卑しい推断は、篠原辰也、お前の卑しさを以て「黒馬」を汚すものだと言われるにちがいない。それが分る故に、余計、この汚い奴を牧野などの面前に叩きつけたい欲望を感ずるのであった。

「嗚呼いやなことだ」という嘆息は、左翼グループの内

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 14 10.4.26 2:40:22 AM

輪のなかで漏らされるのである。けっして体制側の現状にたいして吐かれた言葉ではない。

題名の由来

それにしても、『嗚呼いやなことだ』というのは、なかなか印象的な題名ではなかろうか。つい、拙稿の表題にも借りてしまった。「嗚呼いやなことだ」は、小説のなかの会話に登場する言葉である。労働者とともに細々ながら根気よく運動を続けている、「刷同」（全協刷新同盟）の幹部、岸谷達夫が、語り手との会話のなかで思わず「嗚呼いやなことだ」と溜息をつく。

この人物は、語り手によって肯定的にとらえられている。「親愛の情に溢れた」態度や、「静かだが力強く奥行のある響き」、「今なお労働者のなかにあって生きているインテリゲンチャだけに与えられる響き」をもつ言葉は、転向と挫折によって荒みきった語り手の心をほぐしていった、というように描かれているのである。

岸谷達夫は、一高で高見より一学年下で、一高文芸部の後輩でもあった内野壮児（一九〇八―八〇）をモデルとしているという。内野は一九二八年に検挙されたあと東京帝国大学を中退し、全協（日本労働組合全国協議会）のオルグとなった。したがって内野もまたエリート左翼であり、高見とともにプロレタリア文学活動に携わった「文学」派でもあった。内野は、高見の死の直後に「高見順をいたむ」（『新しい路線』一九六五）を書き、『高見順全集』月報6に一高時代の思い出記を寄せているが、これらの「親愛の情に溢れた」追悼文からも、岸谷達夫の性格が浮かびあがってくるように思われる。

その岸谷達夫が「嗚呼いやなことだ」と呻いてしまう。花輪恒雄の自殺と花輪の兄の発狂をめぐって、かつての同志たちが互いに非難しあい、疑いあい、自己弁護を繰りかえし、弾圧と仲間割れのなかで少しずつ「気ちがい」になっていく。同じ理想のもとに闘い傷ついた仲間であるのに、あるいはそれゆえに噴きだしてくる感情、正義感と自己犠牲精神に支えられた反体制運動が必然的に作ってしまう組織内の序列、政治活動があからさまに表面に出してしまう人間関係のゴタゴタ。それらの卑しさを見せつけられたとき、思わず「嗚呼いやなことだ」という言葉が出てくる。

だが、ここで重要なのは、「嗚呼いやなことだ」と嘆くのが語り手ではなく、組織と運動を継続させている岸谷達夫であるということだろう。おそらくあらゆる政治的組織と運動には付き物であろう「嗚呼いやなことだ」という状況。それをよく知っているにもかかわらず挫けることのない岸谷達夫を、高見順は肯定的に描いたのである。

高見順自身は、しかしながら、このような「政治」的人間ではなかった。高見は『昭和文学盛衰史』のなかで、野間宏（一九一五―九一）が下した次のような転向文学の定義

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 15　10.4.26 2:40:23 AM

を紹介している。「転向文学は、自分の転向の意志を表明し、思想的に転向して新しい思想を求める文学ではない。あくまでも共産主義運動マルクス主義思想の正しいことを信じ、それに前進しようと考えるが、自分自身の弱さを振りかえり、たたかい破れた自分自身を徹底的にみきわめ、自分の限界をさだめて、その限界内においてあくまで良心をまもり、生きて行こうという決意にいたる自覚を追求した文学である」。

そしてこの引用のあとで、「転向文学とはこういうものであったとわたしは思うのである。実感としてもそう頷かれるのである」と付け加える。実際、野間宏はこうした転向文学の具体的作品として「私の『故旧忘れ得べき』『嗚呼いやなことだ』もあげている」、と。

たしかに、高見を喜ばせた野間宏の解釈は、この拙稿がずっと追ってきたことを、もう一度示してくれるだろう。高見順にとって、左翼運動も転向文学も、まずは、自分がいかに生きるかという倫理的（ひょっとすると教養主義的）問題なのである。それが左翼たる高見順の「ダメなところ」なのかどうかは、にわかに判断はできない。

わたしにとって明らかなのは、高見順ほど、この「ダメなところ」（つまり「嗚呼いやなことだ」）を容赦なく描いた転向作家はいないだろうということだ。しかし、高見順の作品を読んで、左翼はダメだな、とは感じられない。なぜなら高見は、左翼的心性こそが自分自身の「ダメなところ」（野間宏の言う「自分自身の弱さ」）を見つめうる強さをもっていることを、身をもって示そうとしたからである。

わたしは左翼への期待を、ほとんどロマン主義的な期待を捨てきれないので、こういう結論を導きだしてしまったのかもしれない。特集の趣意にはそえなかった。仕方ない、許されよ。

＊高見順の作品については勁草書房刊の『高見順全集』から引用したが、旧漢字、旧かなづかいを新字新かなに改めた。

＊本文で触れなかった参考文献

磯田光一『比較転向論序説』（勁草書房、一九六八）
土橋治重『永遠の求道者　高見順』（社会思想社、一九七三）
坂本満津夫『高見順論』（東京新聞出版局、二〇〇二）

悍

03_HAN_04_F3_TAKADA.indd 16　10.4.26 2:40:24 AM